

---

# アンリアル2

夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンリアル2

### 【Nコード】

N9474Y

### 【作者名】

夜

### 【あらすじ】

夕立が止んだあの日から、彼の心は止まっている。癒せない渴きをかかえたまま——暗殺者兵間雪奈は本部に異動になった。しかし、その原因ともなった黒崎兵吾は何かと絡んできて煩わしい。何を考えているかさっぱりわからない。『アンリアル』の後の物語。サイト『Dis P a t e r』でも公開中です。

指をかけた、この引き金一つで人生が変わるなんて滑稽すぎる。ほら、スコープの先で一つ命が終わる。

人殺し、他人はこの行為をそう言う。

でも、誰だって願ってる。

あいつに死んでほしいって、誰かを殺してしまいたいって。

私は自分の意思で殺しているわけでもないけど、そうすることで神様になれるなんて思ったことはない。

人は人でしかなくて、それ以上にはなれない。

たとえ、人を殺めても。

失敗は許されなくて、その先にあるのは死で、地獄。

\*\*\*\*\*

面倒臭いとか思っても、やらなきゃいけないことはわかってる。それが私が選んだ道、私のリアル、引き返せないから、闇しかなくても進む。

生きる環境が多少変わったところで、何かが劇的に変化するわけでもない。

いずれ慣れて、今は恋しい前の場所を忘れてしまいう日が来る。懐かしむ暇なんてきつとない。

どうせ、一つの場所には留まっていられない。それでいい。刹那に生きて、散っていくことだけが全て。

ただ、未だ慣れられないことがある。

その人に会うのだけは、どうしても慣れられずにいる。

「お疲れ様です」

平静を顔に張り付けて、ただ自然に言っ、通り過ぎようとする。それだけのことに神経を使うのは、毎回、それだけで済んでくれないから。

「ユキ」

名前を呼ばれて立ち止まる時、顔に出ていないか不安になった。

この人が苦手だ。何度会ってもその意識は変わらない。

跳ねたセミロングの髪は染めもせず黒々としている。

いつもワイルドなファッションに身を包むその人は黒崎兵吾——  
ブラック・パンサー

“黒豹”と呼ばれ、組織でトップの実力を誇る暗殺者。

そのコードネーム通り獣のような空気を纏っている人だと思う。

ここに来て以来、顔を合わせれば絡んでくるこの人が苦手。

「何でしょうか？ 黒崎先輩」

「おいおい、ヒョーゴでいいって何度も言ってるだろ？」

馴れ合いなんて、私たちには必要ないと思う。

でも、その人はそういうものが好きらしい。

「ユキ」

兵間雪奈ひょうまゆきなだからユキ、あるいは、“雪豹”と呼ばたがる。正直、

この人にはユキなんて呼んでほしくないんだけど、言っても無駄。

言えば余計に面白いがる。この人はそういう人。

「何ですか？」

「呼んでみたくなっただけ」

「……暇なんですね」

この人のことは本当によくわからない。会う度に絡まれて、大体意味はない。

今日も報告を終えて、さっさと帰りたいのに、そういう時に限って遭遇する。

「お前、俺にそんな口きいていいと思ってんのかよ」

「そうですね。私は先輩と違って、いつでも切り捨てられますから」  
言った瞬間、睨まれて息が詰まりそうになる。

「それ、どういう意味だよ？」

なぜ、そんなことを問うのだろう。わざわざ私に言わせたいのか。  
この人にとつても、それはわかりきったことであるはずなのに。

「先輩はボスの男娼らしいじゃないですか」

「お前っ……」

ボスとこの人の間に肉体関係があることは、この人間なら誰もが知っている。

ボスが好色な女性であることをみんなが知っていて、この人がそのお気に入りであることなんて明らか。

支部からやってきた私にもすぐにわかった。

「別に軽蔑してるわけじゃないです。そういうことも暗殺者としては必要だっけ知ってますから」

この人がボスと寝ようが何しようが、私には一切関係ない。

「まあ、お前みたいな貧相な身体の色気もねえガキじゃあ、ロリコンのスケベジジイの相手しかできねえだろうよ」

舐めるように見てきて、棘のある言葉を吐き捨ててくる。でも、そんな小さな棘じゃあ傷付かない。

「私がこちらに飛ばされたのは、先輩のせいだっけことをお忘れですか？」

「はっ、別に、俺のせいじゃねえし」

「全く関わってないなんて言えるんですか？」

誰だっけ、あの件について聞けば、この人に原因があると言うはず。

あの子に全く非がないってこともないけど、この人が無関係ってことはあり得ない。

「あのなあ、この世は溺れた方が負けなんだよ。藁掴んだって救われねえ」

折れるように溜息を吐く様はわざとらしいとしか言えない。反省

の色なんて微塵もない。

「そういう駆け引きを組織内でするべきではないかと」

はつきり言って迷惑以外の何物でもない。

言ってしまえば面倒になるから言わないけど。

「仕方ねえだろ、溜まるもんは溜まるんだ。それに、誘ってきたのはあっちだし」

「最低な男ってそう言いますよね」

あの子のことだって、私はよく知らない。この人のせいで私と入れ替わることになった同い年の女の子。

「大体、使えねえ男連れでやってきた奴が偉そうなこと言ってんじやねえ」

「支部長の餞別です。彼が最も信用できますから」

何て品のない言い方だろうか。私と一緒に本部にきた彼は私のパートナーというわけではない。

支部長に厄介払いの意図がなかったとは言えないと思う。

ただ私にとって兄のような人、この人が言うような性的な関係は一切ない。

「あんなのただの工口要員だろ、暗殺者としては完全に不能だ」

私はそれを否定することができない。

最早、あの人は元暗殺者でしかなくて、支部では主に情報収集をしていた。表の職業はホスト。

私は別に軽蔑なんてしない。彼が苦しんでるのを知っているから。だから、軽蔑するなら、この人の方。

「先輩に他人を侮辱する資格があるんですか？」

あの人は別にセックスを売り物にしてるわけじゃない。

「お前、ほんと、生意気だよ」

「ありがとうございます」

褒められてないことぐらいわかってる。

何を言われるか身構えて、でも、言葉はなかった。

代わりにあったのは、一瞬の隙をつく攻撃に等しい行為だった。避けられなかった私の完全なる不覚、唇に触れた感触、間を置いてその意味を理解して、一気に頭に血が上る。

そのほんの少しの接触、虫が止まったような、何でもないようなことだったのかもしれない。

だけど、それは私にとって侮辱でしかなくて、考えるよりも先に手が動いていた。

馬鹿にするような笑みを浮かべるその顔めがけて手のひらが――手首が受け止められた。手のひらは予定の位置には届かなかった。「随分、気が強いんだな。まさか、チューは初めてとか言わねえだろ」

軽々と私の拳を受け止めて浮かべる笑みは“黒豹”の名にふさわしく獣じみていた。

「本当に懲りない人ですね」

あの子とこの人の関係がどう始まったかなんて知りもしないし、知りたくもない。でも、もう一度ゲームを始めたいのかもしれない。そう思ったら刹那の怒りよりも呆れがやってきて、力が抜けた。それなのに、離してもらえない。振り解けない。

それどころか、壁に押し付けられ、見下ろす顔が近くなる。

さつきはどうだったかなんてわからない。余裕がないと言うよりも認識できていなかった。殺し合いだったらと思うとぞっとするほど油断していた。

身内さえ信用できないとわかっているのに。

「別にお前に気があるわけじゃねえよ。ぶっ壊してやりてえと思っただけ」

猛獣の如きぎらついた目が私を射るように見る。どこまでも鋭く、その笑みを浮かべる唇の向こうにある牙を隠さないかのように。

「私は壊れるわけにはいかないんです」

私が壊れたらあの人はどうなるんだろう。

「そんなにあいつが大切か？」

「そうですね、大切な仲間ですから」

見透かされたように笑うその人に、怒りはもう沸いてこなかった。  
「気に食わねえんだよ、お前」

それが本心、こつちに来てから顔を合わせる度に絡んでくるのは  
そういうこと。私を潰したいから。

でも、私が何かをしたわけじゃない。

「先輩こそ、もうこの世にいない誰かのことで私に当たるのは止めて  
いただけますか？」

「何だよ、それ」

今度はその人が怒りを見せる番だった。けれど、侮辱の後でタブ  
ーに触れるのは怖くなかった。

「先輩がライバルを失ったからって、私には関係ありませんから」  
あの人を不能だと笑うなら、この人にだって今からそうなる可能性  
は十分にある。

“黒豹”は唯一最大のライバルを失った。その孤高は決して栄光  
の舞台ではなく、単に競争相手が崖から飛び降りたってだけ。

それは永遠に負けたってこと。もう勝つことなんてできない。

「では、これで失礼します」

抜け出そうとして、やっぱりできなかった。

もう一度、今度はより強く壁に押し付けられる。

暴力的で、プロの暗殺者らしからぬ冷静さを欠いた行動に思えた。  
先輩からの警告のつもりなのか、そんなのはどうだっていい。

「っ……」

さっきのはほんの接触到すぎなかった。

改めてそう思うのは、思考を奪おうとするそれから逃れたかった  
からなのかもしれない。

逃げたいのに逃げられない。逃げることを許されない。

「なあ、俺と組まねえ？」

唇が離れて、その人は耳元で囁かれた。

わけがわからない。趣味の悪い冗談。一人で全然やれるはずなのに。

「先輩は下種です」

その目に映るものが何なのかわからない。怖いとも思っている。でも、逃げ場はなし。作るか、過ぎ去るのを待つか。

「俺たちは皆そうだろ。それとも、自分は違うとか思っちゃってるわけ？」

「先輩は殺しを楽しんでいます」

それは噂で聞いていたこと。でも、ここにきて事実だとわかった。「ビジネスは楽しくなきゃ続かないんだぜ？」

その笑みは肯定、隠すつもりなんてないんだろ。隠す必要もない、ボスのお気に入りだから。

「余計なオプションを付けることが、そんなに楽しいですか？」

「付けてみりゃあわかる」

わかりたくもない。私たちは暗殺者であって殺人鬼じゃないから。そのオプションが先輩ですか？」

ニヤリと笑うのは肯定なのか。随分とリスクなオプションだ。「一方的な競争を仕掛ける相手がいなくなったから今度は私を潰すんですか？」

ライバル組織トップの暗殺者にこの人はかなりご執心だった。

でも、彼女は死んだ。同じ組織の、それもパートナーだった男に射殺されたことになってる。理由は恋をしたからとか何とか。それ以上のことはわからない。

その時は私もこっちに来て、それほど経ってたわけじゃないし、担当じゃなかった。

それほど興味もなかった。ただ、それまでは軽い絡みだったのが、その時からひどくなった。

「別に失ったわけじゃねえよ。手放してやったんだ。それだけだ。じゃあな」

勝手に引き留めて、都合が悪くなるとすぐにいなくなる。あまりにも身勝手。

\*\*\*\*\*

家に帰れば明かりがついている。

私は天涯孤独、だけど、兄がいることになっている。

「おかえり、ユキ」

そう微笑むのは、一言で済ませるならチャライ風貌の男。

京——志岐京史郎しぎきょうしろう、私が支部にいた時一番信賴していた先輩。今は暗殺から離れて、主に情報収集のためにホストをしている。見た目通りのご職業ってこと。

髪はアッシュブラウンに染めていて、きっちりセットされている。私が帰ってから出勤するからスーツを着ている。

「ただいま、兄さん」

とても私の兄には見えないけど、そういうことになってる。

そうでなければ、ホストと女子高生の同居なんて不審がられる。

「そんなに徹底しなくて誰か聞いてないよ」

盗聴器があるわけでもないし、と京は笑う。そういう被害妄想がひどいのは私の方じゃないはずなのに、今の京は落ち着いてるみたい。それはいいことだけど。

「肝心なところでボロが出たら困るから」

「雪奈なら大丈夫。まあ、俺は特に変える必要もないんだけど」

兄役だろうと、京の私に対する接し方は基本的に変わらない。苦勞するのは私だけ。

「せめて、京兄とか可愛い感じにしない？」

「もっと可愛い女の子に言わせた方がいいよ」

京兄なんて私のガラじゃないし、お願いを聞いたらどんどんエス

カレートするのはわかってる。

「今日はどうだった？」

肩を竦めてから、京が聞いてくる。毎日、それを聞くのが義務みたいになってる。

「また豹に絡まれた」

大体、これがお決まりの返答。

こっちにきて、そんなに経ってないのに、この頻度の高さは何だろっ。

「俺も会ってみたいな」

「会わない方がいいと思うけど」

「そうかな？」

これもお決まりの会話。京はあの人に会うべきじゃない。絶対に会わせたくない。

絡まれるのは私だけでいい。きっと、あの人はこの人の亀裂に触れて、粉々に壊してしまうから。

「そろそろ、出勤でしょ？」

「行ってくるね」

「行ってらっしゃい」

偽物のドライな兄妹。でも、京が望むから玄関で見送りだってする。

「行ってらっしゃいのチューとかダメ？」

靴を履いて、出て行くと思ったら、くるりと振り返る。

「兄妹はしないでしょ？ 新妻じゃあるまいし」

一体、私に何を求めているんだろう。

「俺からするから、ユキは動かなくていいよ。ね？」

「兄さん」

その声に少し、呆れと怒気を込める。

別に嫌いなわけじゃない。

ただ、恋愛的感情は存在しない。それは京にとっても同じこと。心を開けて、ワガママを言える同業の女の子が私ってだけ。

「折角、ユキと同棲するんだし、もっとベタベタのキョーダイがいのにな」

「さっさと仕事に行きなよ」

半ば追い払うようにして、ようやく出て行く。本当に渋々といった感じで、帰ってきたら仕返しをされるんだろうけど、何でも要求を飲むことは正しいことじゃない。

京は私の保護者じゃない。私が京の保護者という扱いになっている。

私は京を守らなければいけない。

今にも壊れてしまいそうな京を繋ぎ合わせていなければ……

ああ、まただ。うんざりする。

ここで、その人に合わないということの方が難しいとはわかって  
いるけれど。

「ユキ」

「お疲れ様です」

黒崎兵吾、この人は本当に何度会っても緊張する。同じやりとり、  
私はそれで構わないけれど、不満げだ。

本当に厄介な人だと思う。素通りなんかさせてくれない。

「なあ、お前、もっと髪伸ばせよ」

不意に髪に触れる指、ビクリと反射的に肩を上げれば面白そうに  
笑う。

「それは、私が“彼女”に似ているからですか？」

「似てなんかいいえよ。ただ、俺は髪が長い女が好きなんだよ」

ボスに、それから他の人に言われたことがある。私は“彼女”に  
似ているのだと。

“彼女”——この人のライバル、ライバル組織のトップ暗殺者レ  
イン。もうこの世にはいない人。恋をして、組織を抜けようとして  
自らのパートナーに射殺された女の子。

夕立のようだったと言われる彼女を私は知らない。

「でも、あの子は短かったですよ」

この人と関係を持った女の子、私が代わらなければならなくなっ  
た子はボブカットの可愛い子だったと聞いている。

「だから、あれは俺が誘惑したんじゃないっつもの」

「彼女は先輩に誘惑されたと言っていたらしいですけどね」

最後まで彼女はこの人から離れたくないと言っただけ。愛して  
いるのだと、愛されているのだと叫んでいたと言う。私はそれを聞  
いてぞっとした。

「女は平気で嘘を吐くだろ」

それはあなたの方だと言えたならすつきりしただろうか。言えるはずがない。面倒を避けたいから。

「何で、髪が長い女が好きなんですか？」

聞きたくもないけど、きつと聞いてあげないと逃げられない。

「掴んで引つ張りてえから。あ、バックの時にな。あ、わかるか？  
何なら、実際に……」

「最低なのが体に染み着いてますよね、先輩って」

その先を言わせるのは不快だった。もちろん、させるのも。

「冗談だ」

肩を竦めて笑うこの人は何を考えているのかわからない。。

「センスのない冗談ですね」

本当に、最悪だ。どんどん嫌な気分になってくる。

「お前は長い方が似合うってのは本心」

また髪がさらりと撫でられる。こうやって、その笑みで彼女を虜にしてきたのだろうか。私は絶対そうならない。

「信用しませんよ」

「信用しろよ、お前のパートナーになるんだから。もちろん、仕事のな」

恋人としてのパートナーであるとは思わなかった。そんなおぞましいこと考えたくもない。

「なあ、俺と組まねえ？」

先日の言葉が蘇る。悪趣味な冗談がはつきりと耳に残っている感じがする。

「それはボスが決めたんですか？」

「いいや？俺が決めただけ」

おどけたような答えでほっとした。ボスの命令だったなら逆らえない。でも、勝手に決めたと言っても決定事項ではないはず。それは冗談と同じ。

「辞退させていただきます。私のパートナーは決めていますから」

「あいつはもう終わってる」

「終わってません。だから、待つんです」

私には京がいる。パートナーだったわけじゃない。元々決まった相手がいたわけじゃなくて、色々な人と組むことがあった。その中で一番信頼していた先輩。今は暗殺者としては失格かもしれないけれど、必ず復活すると私は信じている。

「お前には俺が必要だ」

そんなことはありえない。勝手に決められたくない。

「彼には私が必要なんです」

これは本気で思っている。彼は私を必要としている。それは確かなことだけど、それだけじゃない。

「俺にはお前が必要だって言ったらどうする？」

それもありえないことだ。ひどい冗談だと笑えてくる。

「私は先輩には必要のないものです。失礼します」

私はこの人に必要とされる人間じゃない。パートナーにもライバルにもならない。

そうして、一礼して足早に去った。

\*\*\*\*\*

“黒豹”——そう呼ばれる男はその名の通りぎらついた目で相手を見た。獲物を前にした猛獣のような気分で舌なめずりする。

「よお、新入り」

滅多にここに現れない男を前に兵吾は笑みを見せずにはいられなかった。

「確かに、ここでは後輩かもしれないね」

標的——志岐京史郎は肩を竦める。兵吾よりも少し年上の男だが、彼の言葉通りだ。ここでは、兵吾の方が先輩であり、今や実績も上である。

「殺しができねえ奴なんて先輩でも何でもねえからな」

「ああ……そういうこと」

特に傷付く様子を見せるわけでもなく、京史郎は納得した様子だった。こんなからかいも慣れているだろう。今までいた場所でもそうだったはずだ。

トリガーを引くことができなくなった人間に優しいところではない。

「俺が殺しを教えてやるのか？ 新入り」

「俺は今は情報収集に専念してるから」

いかにも容姿通り彼は組織の系列のホストクラブで働いている。元々、そういう才能もあつたと言うが、兵吾としては納得できない。「だったら、引退しちまえよ。殺しは辞めたつてはつきり言えよ」「いつでも戻れる」

「嘘だな、このまま一生戻れねえよ」

虚勢だと兵吾は笑い飛ばす。彼の前の巢は随分と甘かったようだ。使わなければ勘は鈍る。戻れると思っているのは本人だけだ。彼がいつまでも過去に縋り付くから、進めずにいる人間がいるのに、彼は見ようとしなない。

「ユキだって、メーワクだろ。あんたが戻るかもしれないと思ってパートナーを決めねえ。あんたを選び続ける。あんたがあいつの信頼に、優しさにつけ込んで縛り続けるから」

兵間雪奈、その名前を出せば京の表情が変わる。彼にとって特別であることはわかつている。

彼女が懐いていたように、この男が彼女を大事にしていたこともわかつている。けれど、精神状態は不安定で、腕のいいスナイパーであつたのに、今はホストなのだから落ちぶれたとしか言いようがない。

支部長も見切りをつけ、餞別だと体よく彼女に押し付けた。

「それがあいつのためにならねえって、わかつてるだろ？」

いっそ、彼の存在がない方がいいと兵吾は思う。けれど、絶対のパートナーを失って墜ちた男を知っている。

「あんたが戻らねえなら、俺がユキのパートナーになる」

言い放てば明らかな敵意が向けられたのがわかる。仕事柄、殺気には敏感だが、やはり彼はどこか欠けたナイフのようだ。

「いつまでも一人じゃいけねえ。その内、あいつにだって後輩はできる。だが、あいつはまだ経験不足だ」

「雪奈は支部では一番だった」

そんなことは兵吾も知っている。だから、今まで以上の伸びしろを期待して本部の荷物と化した少女と交換したのだ。同い年でも別物だと見た時から思っていた。初めから彼女がここにいれば良かったのだと思うぐらいだ。

「はっ、そりゃあ田舎の話だろ。ここじゃあ俺が一番で、あいつはまだ足元にも及ばねえ。だから、田舎娘に俺が直々に指導してやるって話だ。悪くねえだろ？」

いずれは自分を越える暗殺者になるだろうという予感はある。だが、今のままでは潰れてしまうとも感じている。

全ては目の前にいるこの男のせいだ。

「嫌なら、あんたが俺と組めよ。一度でいい。上手にできたら、俺がボスに言ってやるよ」

悪い条件ではないはずだ。一度だけパートナーを務めて、仕事が成功すれば彼の復活と、二人をパートナーとして認めるように兵吾がボスに口添えする。

それだけの権力を今の兵吾は持っている。自分の願いを通すために体を差し出すことにも抵抗はない。元々、兵吾も好色な質だ。

だが、京史郎は疑いの眼差しを向けてくる。

「おいおい、信頼しろよ。あいつは俺のことをボスの男娼だって言っただけだ」

彼女に言われるのは妙に気に食わなかったが、事実そういう関係なのだから仕方がない。

「ボスのお気に入り俺が後押ししてやるって言ってるんだ、素直に聞けよ。それとも、本当は不能なんじゃねえの？」

彼を焚き付けるのは兵吾にとってたやすいことだった。彼にとっ

て雪奈の存在は甘い蜜だ。自分の物になるか、他人の物になるか、それは大きな問題だ。特定のパートナーがいなかったこれまでも違う。

「……わかった。ただし、俺が戻れたら、雪奈にちよっかいは出さないでほしい。ここで君に会うのが憂鬱みたいだから」

じわりと兵吾の中に苦々しいものが広がる。彼に言われずともわかっていた。雪奈は兵吾を見る度、嫌そうなうんざりしたような表情を見せる。

嫌われていることは百も承知だ。

「ガキに興味はねえよ。俺はいい先輩なんだぜ？」

二カッと兵吾は笑ってみせる。これはゲームだった。最大の獲物を永遠に失った獣の戯れだ。

せいぜい楽しませろよ、と心の中でほくそ笑んで肩を組んだ。

\*\*\*\*\*

ムカムカする。何も納得できなかった。

学校帰りに本部に寄って初めて私が暢気に表向きの人生のために授業を受けている間に起きたことを知らされた。

決定事項として伝えられたのは京がこの先暗殺者として使える見込みがまるでないこと、情報収集でさえ上手くできないようになれば未来はないということ、そして、私が“黒豹”のパートナーになるということ。

京が報告のために本部に行くと言っていた時から妙な予感があった。報告自体は傘下のホストクラブを通してしているけれど、直接聞きたいとボスが言ってきたそうだ。

散々私に絡んでくるあの男が京を見逃すとは思えなかった。案の定、パートナーとして仕事をしろと持ちかけたらしい。危惧した通り、京の亀裂に手を突っ込んだ。

家へ帰れば明かりはついていなかった。

今夜は休みになったと言うから、休んでいるのかもしれない。久しぶりに暗殺の仕事に出たらしいから。

でも、嫌な予感がしてる。見込みなしと判断されたってことは上手くできなかったってこと。任務は“黒豹”が問題なく遂行したから処分に値するものでないとは言いつけれど、その通告がどれだけ重いものかをわかってない。

「ただいま」

京が家にいるのは気配でわかる。靴は脱ぎ散らかされていて自分の靴と一緒に揃える。

その時、京が動いたのを感じた。

「ただいま、兄さん」

どうしたらいいかわからなくて、いつも通りに口にする。

電気をつけようとして抱きすくめられる。相手はわかっている。だから、暴れるつもりはない。けれど、手探りで電気をつける。

広い胸がそこにあって、動けない。

「兄さん」

もう一度、確かめるように呼んで、力が込められるのを感じる。

「……京」

力が緩む。でも、抜け出せない。

前にもこういうことがあった。あれは、京が暗殺者としてダメになった時、あの時から私は彼の安定剤になった。

仕事でミスがあったわけじゃない。パートナーのミスによってパートナーを失った。自分の援護が間に合わなかったことを悔いて、死を恐れて、引き金を引けなくなった。死んだパートナーと同じように。

「ねえ、雪奈。何がほしい？ 何でも好きなモノを買ってあげるよ？ 服でも宝石でも」

「要らない。何もほしくない」

そんなものがほしくて生きてるわけじゃない。

彼だって同じはずだ。組織の系列のホストクラブに飛ばされてからナンバーワンに上り詰めた彼の稼ぎは相当なものだと思う。

「凄く可愛いネックレス見つけたの。雪奈に似合うよ」

私は着飾ることに興味はない。

「こっちのワンピースも。さ、着替えて」

手を引かれて行けば、可愛らしいピンクの花柄のワンピースがかけられている。ヒラヒラのふわふわ、私の趣味じゃない。

「これから高級レストランにでも行ってみようか」

京は笑っているけれど、無理しているのは明白だ。何かを振り払おうとするかのように。

「ねえ、何があったの？」

「別に、何もないよ。お休みもらったし、そういう気分なだけ」

違う。そんなことじゃない。私だって、京のことを何もわかってないわけじゃない。

彼が嘘を吐く結果は知っている。それを彼に言わせるべきではなかったのかもしれない。

「そうは見えない。豹に何を言われたの？」

あの男のことだ。一切の容赦はなかっただろう。京の心を壊すことなんて標的を一人殺すよりもずっと簡単なはず。

「結局、どれだけ稼いでも俺は空虚なままの孤独な男、金なんて必要ないって気付いただけ、だから、俺のお金は全部、雪奈のために使ってあげる」

「必要ない」

京はいつでも戻れると思っていた。ただし休んで、諜報活動に専念するだけなのだ。でも、もう戻れないと突き付けられて、抛り所がなくなってしまったのかもしれない。お金だけが虚しく手元にあるのかもしれない。

「ねえ、雪奈、お願いだから、俺を拒絶しないで、俺から離れて行かないで、ずっと側にいて」

「側にいる。だって、仲間だもの」

ほしがっているのはそんな言葉じゃないってわかってる。でも、私はそれしか言っておげられない。

「どうして、一番ほしいものは手に入らないんだろうね、こんなに近くににいるのに」

もう一度、抱き締められて、ただ動かずにいるしかなかった。

「愛がほしい、偽りでもいいから、俺のこと、愛してるって言うて？」

それは、禁断の言葉だと思う。絶対に言うべきじゃない。言ってしまったら、後戻りができなくなる。偽りでもいいなんて、絶対にダメ。

京が必要とするなら、私は側にいる。でも、一緒に堕ちるつもりはない。

「京。私と組もう？ 大丈夫だよ。あいつとは相性が悪いだけ」

もしかしたら、つてずっと思っていた。けれど、私でダメだった時に本当に京が終わる気がして怖くて言えなかった。

明日からあの男と組まなければならない。でも、狙撃の天才が蘇るなら、ボスも文句は言わないと思う。あの男に私の力は必要ない。誰の力も必要ない。

「ダメだよ、雪奈。あいつは俺から君を取り上げるから」

京は弱々しく首を横に振る。いつも綺麗にセットされている髪はボサボサで女性を射止める目は赤く、瞼は腫れぼったい。あの時でさえ、手が震えて動かなくなったことをただ呆然と受け止めていたのに。

「だから、今日だけは……」

ギョツと抱き締めてくるその腕が悲しい。大型のライフルを従順な恋人のように扱っていた腕はもうないのだと思った。トリガーを引く指は髪を撫でるだけの武器に成り下がった。獲物を射る目もそう。

必要とあれば男も相手にする。この人はもうそういうものになっ

てしまったんだ。私が憧れた狙撃手<sup>スナイパー</sup>はもういない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9474y/>

---

アンリアル2

2011年12月2日17時45分発行